

パンタール通信

南北米福地開発協会 会報 2005年10月1日発行 第25号



第6回国際協力青年奉仕隊(8月25日-9月14日)パラグアイ、カトレセ デ マジヨ村にて活動



子供達に折り紙を教える。



小学校校舎土台工事

第六回国際協力青年奉仕隊が多
くの方の支援と期待の元に八月
二十五日成田を出発し、アメリ
カ、ブラジルを経由し、パラグ
アイの首都アスンシオンに到着
そこからバスと舟で目的地方ト
レセ デ マジヨ村に到着しま
した。日本を出発して四日後、
遠い遠い道のりでした。
到着するとすぐに好奇心溢れる
村の子供達が学生達の周りに集
まり、一人一人の学生の周りに
グループができ、自然の中での
交流が始まりました。
八月の気候は日本と全く反対の
冬で南米とはいえ、肌寒いほど
でした。早速、日本救援衣料セ
ンターから頂いた衣料と川崎市
の市民の方から送って頂いた文
具を一人一人の子供達に袋に入
れて渡しました。子供達は受け
取った服をすぐに着て、心から
感謝と喜びを表していました。
男子学生達はすぐに学校建設の
土台の基礎固めの労働を、女子
は子供達に、折り紙を教えたり、
縄跳びなどをはじめました。
学生達にとっては日本と全く異
なる生活環境の中で驚くことば
かりであったようですが、賢明
にインディヒナの子供の未来の
ため学校を建設できることに喜
びを感じ、彼らが賢明に働く姿
に、スタッフとして参加した私
自身、感動しました。

(柴沼邦彦記)

カトレセ デ マジヨ村での活動
小学校の校舎建設の為に土台作り



2005.09.02

子供達との交流



日本語とチャマココ語教室

2005.09.01

レダでの活動

自然との触れ合いと植樹



2005.09.03

レダの植樹園野生のダチョウ

南北米福地開発協会事務局

〒二一三一〇〇〇一

神奈川県川崎市高津区

溝口三十一 十五

岩崎ビル四階

電話

〇四四 八二九 二八二二

ファックス

〇四四 八二九 二八二〇



表敬訪問

『マジヨ村での奉仕をした後、パラグアイ、

ジャイカ



日本大使館



教育省



A B C 新聞社

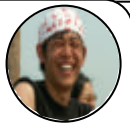


アスンシオンにあるジャイカ事務局と日本大使館を訪問した。ジャイカと日本大使館が今日までパラグアイに行なってきた支援活動について聞き、国際社会での日本の役割に理解を深める事ができた。また、教育省を訪問し、副大臣からパラグアイ教育の現状を聞くと共に今回のマジヨ村での体験を報告した。インディヒナ村への教育は政府もほとんど指導をすることが出来ずにいるので、当協会の活動に注目しているところであった。その後、ABC新聞社に訪問し、貴社からインタビューを受け、記事が次の日に掲載された。

イグアスの滝と鳥の公園訪問



参加者の感想



川瀬史安（新潟大学四年）

この村での奉仕活動は正味四日間と非常に短いものであり、内容も学校建設と子供達の面倒を見るのが主であった。しかし、この四日間が三週間の中での一番貴重であり、人生の中で一度しか味わえないくらい非常に稀な経験のできる日々であったと思う。それ程、普段日本で暮らしている生活とのずれを感じたのだ。見るもの、触れるもの、口にするもの、聴くもの、嗅ぐものまで自分の五感すべてが何らかの違和感を持ったはずだ。今、振り返って見ると本当にそう感ずる。こんな大自然の中であんなにきれいな朝日、夕日を見たことはないし、靴を履いていない子供や衛生のために、体の至る所に斑点のある子ども、そんな彼らと手をつなぐことにちよっとした恐れを感じてしまった自分、トイレの異臭、固くて少し臭みのあるヤギの肉、南米なのに風邪を引いてしまうほど寒い天候の中、本当に心身ともに温まるマテ茶、夜明けに聞こえてくる小鳥のさえずり、そして浅い眠りを必ず妨げた大酋長の歌声……。普通に考えれば到底生活できないような場所に四日間いたわけである。しかし、そんな中にも喜びとか心の豊かさも味わう事が出来たのだ。日本とは比較できないほど、低い生活水準の中で、彼らは本当に純粋な心を持っていたのだ。彼らの笑顔を見るとこちらがうれしくなっていた。子供から大人までみんなそうであった。

南米に出発する前に、川崎にある南北米の事務所ですべて「為に生きる」ということを念頭において奉仕活動をしてくるように教わったが、そんなことは意識しなくてもそれが人間が本来あるべき姿ではないかという思いにさせる四日間であった気がする。奉仕活動自体が為に生きる事であるが、実際そんなことは、意識する必要はないのではないかと思っただ。



和田三和（東京海洋大学卒）

三週間、とても短くて、あっという間に過ぎていってしまいました。日本に帰りたくないような気分です。この3週間、何もかもが初めての経験で、貴重な時間を過ごすことが出来ました。何か人の役に立ちたいとボランティア活動に参加したのですが、結局なにもできなかったように思います。マジヨ村での四日間という短い期間での奉仕活動も、子供達の笑顔に、大自然の中に、都会では味わえない喜びや開放感を強く感ずる事が出来、与えられるものばかりでした。特に子供達とは童心に返って一緒に遊び、無邪気な笑顔に心を癒されました。電気、水道のない、食べることも満足にできない村の方々の生活を見て、自分はとても恵まれた環境にいたんだと再発見をし、何もしてあげられない自分の無力さを実感するだけだった。物質的には貧しくとも心は豊かなのだと感じた。レダに居る期間は乗馬も馬車も釣りも斧を持つのもすべてが初めてで、毎日心踊るような体験をさせていだき感謝しました。